

八幡神社 神像類調査概要
(鳥取県米子市東八幡)

平成二十四年四月

米子市・八幡神社 神像群の調査・公開について

調査の経緯

4月15日（日）開催の八幡神社所蔵の神像群の氏子向け一般公開に先立って、神像群の製作年代や文化財的価値を知っておきたいという依頼が、宮司 内藤和比古氏から関西大学文学部教授 長谷洋一（はせよういち・専門 日本彫刻史）にあり、平成24年3月29日に現地調査をおこなった。

調査の概要

神像・仏像を含む24点の木彫資料（獅子狛犬を除く）の調査をおこなった結果、次の事項が判明した。

- (1) 11点が11世紀から12世紀（平安時代中期～平安末期・鎌倉時代初頭）に製作された神像・仏像であること。
- (2) 平安時代の神像がまとまって確認されたことは、全国でもめずらしい事例といえる。
- (3) 片膝立ての女神（じょしん）像（①）は、広葉樹系（クスと思われる）の一木造（いちぼくづくり）で造られ、片膝を立てる座り方や球状の面部や厚い着衣の表現などから11世紀の作品とみられ、山陰地方（鳥取・島根）で最古級の作品とみられる。（ただし今後、神像調査がすすめば訂正の可能性も）
- (4) そのほかの女神像・男神（だんしん）像も12世紀（平安時代後期）の神像の特徴（豊かな表情や奥行きが少なく肩幅が広い）をよく表しており、現状では神像彫刻（の指定）がない鳥取県や米子市では貴重な作品群といえる。
- (5) 八幡神社周辺には白鳳時代から続く大寺院跡（大寺麿寺・坂中麿寺）があり、次の平安時代の信仰のありかた（神仏習合：神宮寺・鎮守）などを想定できるかも知れない。



1 女神坐像

一 軀

像高 五二・二センチ 平安時代(十一世紀)

髪を束ねて結び上げさらに左右に分け、內衣、「がいとう衣」(外套衣(がいとうえ))、領巾(ひれ)を着し右膝を立てて坐す女神像である。広葉樹(クスか?)の一木から彫り出しており、木芯を像内部中央にこめているために、大きな干割れが走る。髪は墨、衣には赤(ベンガラ)、緑青の彩色が残る。

量感が十分感じられる造形で、袖口の造形も大ぶりである。一般に片膝を立てる坐法は古い像に多く、丸い豊かな面相は平安時代の特徴をよくみせている。同じように片膝を立てる女神像としては、広島・御調八幡宮の女神像(九世紀・重要文化財)や奈良・大和文華館女神像(一〇〜十一世紀・重要美術品)があげられる。本像は、体の各部分の分節が明瞭ではなく、大和文華館像と比べると若干古いように思えるが、立てた右膝の衣文を刻線であらわすなど新しい要素もみられるので、十一世紀の制作と考えられるが、もう少し古くさかのぼる可能性もある。鳥取県下の神像はあまり知られないが、県下最古級の神像として位置することは間違いない。



2 女神坐像

一 軀

像高 三三・二センチ 平安時代（十二世紀）

髪を束ねて結び上げさらに左右に分け、内衣を右衽（うじん・最初に右から着用する）に着し、その上から「がითう衣」（外套衣（がითうえ））を着す。首元のU字はその襟にあたる。襟元には墨線で模様を描くほか、右腹前には花文、右手首にはフリル状の装飾を描く。木芯を像内部中央にこめた一木から像すべてを彫り出している。

ふくよかな丸い面相にやさしい表情をみせ、なで肩の体軀にほどよい肉付け、さらに二等辺三角形に収まるような整ったプロポーションを示す造形は、平安時代後期の神像の典型作品ともいえ、制作時期も十二世紀後半頃とみられる。両手先は失われているが、左手には持物（団扇）を持っていたと推測される。膝前に一部、虫食いなど認められるが全体に保存状態も良好である。

知る限りでは、県下の神像として三佛寺宝物館女神像（鎌倉時代・三朝町指定文化財）があげられるが、本像それよりも古く、先の女神像と共に県の神像を代表する作品といえる。



3 僧形神坐像

一 軀

像高 三四・八センチ 平安時代(十二世紀)

髪を剃った円頂で、內衣・外衣を着け、両手は胸前で拱手(きようしゆ)する僧形神像である。外衣の表面には、衣文や袖の重なりを墨線で描いている。地蔵ではないために耳たぶには穴が開いていない。一木造の像で、木芯は背面中央をわずかに外している。背面には袈裟を着けたような刻線が刻まれている。

丸い面相に見られる表情は若々しく、なで肩の体軀、わずかに両肘が張り出す造形はあくまでほどよい肉付けをもつもので、墨線で描かれる衣文ともども、先の女神像(像高三三・二センチ)と同じ十二世紀後半頃に、同じ作者によって制作されたとみてよい。

僧形神像は、専ら若宮あるいは僧形八幡神像とみなされることが多い。本神社と深いかかわりをもつ神像といえ、また女神像とセットで制作されたことが明確にわかる貴重な作品である。



4 女神坐像

一 軀

像高 三〇・三センチ 平安時代(十二世紀)

髪を束ねて頭上で結び上げ、さらに正面中央から左右に髪をふり分けて肩に垂らす女神像である。內衣・外衣を着し、両手は胸前で拱手(きょうしゅ)する。膝下の部分は朽損しているが、僧形神像と同じようにゆるやかな膨らみをもつ造形であったと思われる。髪を墨彩とし、拱手した袖口には墨による衣文が描かれている。また左肘の袖口にはフリル状の装飾を描いている。木芯を左斜め前にはずした一木からすべてを彫り出し内刳りは施さない。

丸い面相や襟元の造形や墨描きなどは先の僧形神像と共通しており、本像も十二世紀後半頃に制作されたとみられる。わずかに首をかしげるポーズはその表情とあいまって、魅力的でもある。先の女神像とは類にかかる髪表現や肩幅のある体軀など異なるものの、僧形神像と共通する部分が多く、女神像とは表された神名が異なることに拠るものであると考えたい。



5 男神坐像

一軀

像高 二九・〇センチ 平安時代(十二世紀)

巾子冠(こじかん)をかぶり、袍(ほう)を着して坐す男神像である。両手は胸前で拱手(きょうしゅ)して笏をとる。拱手した手の下には平緒の垂れを表す。奥行きのある面部に小さく目鼻立ちをあらわしながら目尻を吊り上げ、口をかたく結んで厳しい表情をみせる像である。

笏を含んで一木造で内割りはない。像底には小さな方形の刻りが認められる。

二等辺三角形に像全体をまとめた造形で、彫りは総じて強く刻まれ、先の神像群とは趣の異なる造形である。とはいえ、なで肩の体軀や両膝の丸みを帯びた造形は共通しており、制作時期は同じ平安時代後期とみられる。

一部に虫損もあるが保存状態もおおむね良好で、男神像にふさわしい威厳のある姿である。



6 男神坐像

一軀

像高 二七・七センチ 平安時代(十二世紀)

中子冠(こじかん)をかぶり、袍(ほう)を着して笏をとる男神像である。両手は胸前で拱手(きょうしゅ)する。笏は拱手した手から彫り出す。中子冠を墨塗りにするほか、面部を白塗りとし顎下や頬下に髭を墨で描く。やや面長の面相に眉や瞼の線を明確に彫り出して意思のある表情をみせる。首元に詰襟のようにみえ、着用している袍が縫腋袍(ほうてきのほう)であることがわかる。

笏を含んで一木造で作られ内割りは施さない。木芯は左斜め後方に外している。

肩幅が広く奥行きの浅い体軀は僧形神像と同じであるが、本像は膝が左右に張り出しており(左側は朽損)、丸みをもちながらブロックを積み上げたような造形である。このことから制作時期は先の作品に比べてやや遅い頃とみられ、鎌倉時代に入るかもしれない。



7 不動明王立像

一 軀

像高 三七・二センチ 平安時代(十二世紀)

両手、両足先を失っているが、不動明王像である。条帛(じょうぼう)を斜めに懸け、裳を着している。頭・体とも一木で制作され背面から内割り(うちぐり)を施している。深い割りながら用材には厚みがあり、平安時代後期以降にみられる薄い材幅の像よりも古様が感じられる。裳の折り返しや衣文は大ぶりながらも浅くあらわされ、条帛は刻線であらわすなど、平安時代にあっても新・旧両方の要素が混在している。

頭部は耳の後ろから喉元にかけて別の材で作られており、現在には小さい穴にほぞを差し込んで接合している。頭部前面材は後頭部材(体軀につながる)と別材であり、接合面は平滑である。いつ、どのような事情で頭部を前後材にしたのか、不明である。

不動明王像の伝来は不明だが、不動明王像は利剣を持つために全国各地の神社でも祀られている。当地での神仏習合のありさまをよく伝える作品といえよう。



8 女神像

一軀

像高 三四・八センチ 江戸（明治時代（一九世紀）

髪を左右に振り分け、正面を向いて正座する女神像である。口をかたく結び、両手は膝前に揃えて置く。髪のみを墨塗りとし、ほかは素地のままである。

神像本体と台座は一本の木から彫り出す。素朴な造形だが、目鼻立ちもはっきりとしており、頭部の曲げや目鼻立ちの表現、体各部の分節や台座などが明瞭にわかり、破たんのない造形となっている。こうしたことから作者は彫刻刀の扱いや造像に慣れた者であると思われる。鳥取県下では、木喰明満の作品が知られるが、この像の台座正面も六角形状に面取りし、そこに像を彫りあらわすなど、木喰の作品をさらに単純化したような表現が認められる。幕末・明治初期ごろの作品とみられ、職業仏師以外の作品としても上質で興味深い。なお、背面に「いろはにほ・・・」の墨書銘が確認できるが、神像との関係はわからない。



9 男神立像

一軀

像高 五四・六センチ 江戸く明治時代(一九世紀)

烏帽子をかぶって正面を向く男神像である。口をかたく結び、両手は胸前に揃えて掌を内に向ける。一本の木から彫り出した素朴な造形で、先の女神像と対になる男神像である。

長い体軀から立像とみられる。正面下部には四角い彫りがなされており、これは杵あるいは足先を表したものである。

女神像にも共通しているが、男神像には着衣の表現が認められない。単純、省略化されたとみることもできるが、古くには神像等を裸形で表し、そこに実際の衣服を着せる事例がある(京都・東寺鎮守八幡宮 伝武内宿禰像や廣隆寺上官王院 聖徳太子像など)。ともに小像ながら素地であることから、こうした流れを受けた作品、あるいは人形(ひとがた)として制作された可能性も考えられなくはない。幕末・明治初期ごろの造像傾向を知る上でも興味深い作品群である。



10 神像残片

一 軀

像高 一九・三センチ 時代不詳

両腕を胸前に合わせて拱手するような形をしており、神像とわかる。損傷が著しいが丸い頭部やなで肩の造形から、おそらく平安時代後期の製作とみられる。

11 神像残片

一 軀

像高 二〇・〇センチ 時代不詳

損傷著しく木の塊のようにもみえるが、よくみると頭部、襟元、肩のラインがうかがえる。襟元の形は、仏像にはみられず、神像とわかる。なで肩の表現から平安時代後期までさかのぼる作品と思われる。



12 童子形立像

像高 二四・八センチ 時代不詳

一 軀

髪を左右に振り分け、腰を曲げてやや前傾姿勢をとる立像である。摩耗のため表情や細かな姿勢などはわからないが、神像に付属する童子像の可能性が考えられる。小さい像であるため台座の一部を含めてひとつの木から彫りだしている。神像関係の彫刻とすれば、平安時代後期にまでさかのぼるかもしれない。

13 如来坐像

像高 一八・〇センチ 時代不詳

一 軀

頭に肉髻（につけい・頭の上にあるおわん状の知恵のこぶ）があり、螺髪を刻むことから如来像であることがわかる。両手の先は失われており像名は明らかではない。卵形の大きな頭部に肩幅のある体軀、衣は両肩を被いゆつたりと着している。結跏趺坐（けっかふざ）するが、両足裏を表している。頭部は軀部とは別材製で、首元に差し込んでいる。



14 如来立像

高さ 五六・八センチ 平安時代

一軀

頭に肉髻（につけい・頭の上にあるおわん状の知恵のこぶ）があることから如来像とわかるが、両手先を失っているため、像名は不明である。衣・裳（スカート）を着す。胸や腹に適度なふくらみを見せ、摩損や破損が目立つものの端正なプロポーションをみせる。体の奥行きは浅く、腹あたりの断面は紡錘形を示しており、平安時代後期、十二世紀ころの製作とみられる。

15 観音菩薩立像

高さ 五九・六センチ 平安時代

一軀

非常に細長い像である。台座の一部を含めてひとつの木から彫りだしている。両腕を失うが、頭の頂がとんがっており、菩薩像とみられる。摩損が著しいが、わずかにみえる衣文（えもん・衣の皺）の彫り込みは非常に浅く、平安時代後期の製作とみられる。



16 天部立像

像高 三八・四センチ 平安時代

一軀

甲冑に身をかため、腰をひねってやや左上を見上げる姿の天部像である。頭の前から台座までをひとつの木から彫りだして内刳りは施されていない。胸や腰の張り、ウエストを絞った造形がよくみてとることができる。

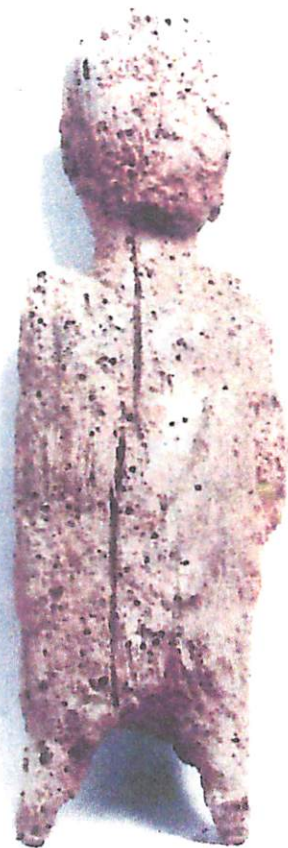


17 菩薩立像

高さ 三三・二センチ 平安時代

一軀

胸から腹にかけて糸帛(じょうはく)・胸前に斜めにかかるタスキ状の衣)がみられ、また腰中央下には袈の折り返しを確認できることから菩薩像とみられる。わずかに膝を曲げる。頭の頂がとんがっており、化仏を差し込む穴がみえないことから聖観音像と思われる。一木造で内刳りは施されていない。細い上半身と張りのある腹や腰の表現から平安時代後期の製作とみられる。



18 破損仏像

高さ 三八・二センチ 時期不詳

一 軀

虫くいが著しいが、頭部、胴体、足の付け根が確認できる。ひとつの木から彫りだされ、内刳り（うちぐり・内部をくりぬく）は施されていない。胸周辺には衣文（えもん・衣の皺）が確認できる。製作時期は不詳だが、体の奥行きは深く、平安時代後期にさかのぼるかもしれない。



19 如来立像

高さ 一七・〇センチ 時期不詳

一 軀

摩損著しいが、衣を着けた立像である。台座を含めひとつの木から彫りだされている。形からみて地藏菩薩像かも知れなく、千体仏の可能性もある。



20 地藏菩薩立像

像高 二〇・六センチ 時期不詳

一軀

衣・裳（スカート）を着す像で、頭は髪を剃り落とし、兩肘を曲げて前に突き出す。左手には宝珠、右手は錫杖（しゃくじょう・杖）を持っていたものと思われる。簡素な彫り口からみて千体仏のひとつかもしれない。

21 如来立像

像高 一九・五センチ 時期不詳

一軀

衣・裳（スカート）を着す像である。兩腕は肘をまげて立つ。兩手先が失われ、頭部も摩損しているため、像名を明らかにすることはできないが、地藏菩薩像かもしれない。ひとつの木から彫り出している。



22 木彫片

高さ 一九・八センチ 時期不詳 一個

一つの材木から頭部・胴部・台座と刻む。ブロックを積み重ねたような造形である。仏像あるいは神像と思われるが、細部がまったく不明であり、像名を明らかにすることはできない。



23 木彫残片

高さ 一六・五センチ 時期不詳 一個

十六センチほどの立像。摩損が著しく、像名を明らかにすることはできない。像本体・台座を同じ木から彫り出す。

◆ 八幡神社神像類 一覧

	名称	像高	髮際高	頂一顎	髮際一顎	面幅	耳張	面奥	胸厚	腹厚	膝張	坐奥	制作時期
1	女神坐像(片膝立て)	52.2	42.4	17.8	8.0	8.2	13.8	13.2	11.4	14.4	33.8	20.7	平安時代(～11世紀)
2	女神坐像	33.2	26.8	13.6	6.8	7.2	11.0	10.2		10.2	23.7	16.0	平安時代(12世紀)
3	僧形八幡神坐像	34.8		10.8		7.6	9.4	10.7	9.8	12.6	19.4	12.6	平安時代(12世紀)
4	女神坐像	30.3	25.5	11.6	5.9	6.2	8.2	8.9	8.6	10.4	14.0		平安時代(12世紀)
5	男神坐像	29.0	22.8	(巾子冠・顎) 10.5	3.8	4.8	5.0	5.6		*6.2	15.8	8.6	平安時代(12世紀)
6	男神坐像	27.7	19.6	(巾子冠・顎) 11.8	4.4	4.8	5.0	6.2		7.2	13.6	9.6	平安時代(12世紀)
7	不動明王立像	37.2	34.2	8.7		5.0	6.2	6.7	8.0	9.2			平安時代(12世紀)
8	女神像	34.8	31.2	8.7		7.2	8.4	9.0					江戸～明治(19世紀)
9	男神立像	54.6	48.3	15.8			8.9	8.7	肘張 17.7			裳裾幅 18.8	江戸～明治(19世紀)
10	神像残片	19.3											時期不詳
11	神像残片	20.0											時期不詳
12	童子形立像	24.8											時期不詳
13	如来坐像	18.0	15.6	7.2		4.2	4.2	5.2	5.6	7.2		10.6	時期不詳
14	如来立像	56.8	52.0	11.3	6.8	5.2	6.8	8.0	7.8	10.4		裳裾幅 10.0	平安時代
15	観音菩薩立像	総高 59.6	像高 53.8										平安時代
16	天部立像	38.4											平安時代
17	菩薩立像	33.2											平安時代
18	破損仏像	38.2											時期不詳
19	如来立像	17.0											時期不詳
20	地藏菩薩立像	20.6											時期不詳
21	如来立像	19.5											時期不詳
22	木彫片	19.8											時期不詳
23	木彫残片	16.5											時期不詳
24	獅子狛犬												室町～安土桃山

(単位: cm)

調査日 平成 24 年 3 月 29 日

調査者・文責
関西大学文学部教授
長谷 洋一